

IV-398

都市内の移動過程が移動者にもたらす機能に関する考察

東京工業大学大学院 学生員 加藤 尊秋

東京工業大学工学部 正 員 肥田野 登

1. 研究の背景と目的

従来、通勤・通学に代表される都市の日常的な移動は時間を消費することから一般に負の効用をもたらすとして論じられてきた。その結果、これらの移動は単に空間的にいくつかの場所を結び付ける手段として単純化され、その過程での移動者の行動の内容が論じられることは希であった。しかし、実際の移動は、電車に乗り見知らぬ人の中で考え事をするというように特定の空間を前提とし、行動や意識の点で実体と広がりを持つものである。したがって、移動の質向上のためには移動者にとっての移動過程の役割（以下、移動の機能という）を知る必要がある。これまでの移動過程に関する研究は、通信と交通の代替性研究の分野等で若干の例が見られ、移動過程が情報収集と密接な関係を持つこと¹⁾や、通勤が仕事と余暇との境界としてはたらいっていること²⁾が指摘されている。しかし、これまでの研究は移動の機能の一部のみに焦点をあてており、機能の全体を捉えていない点が問題といえる。したがって、本研究では、都市における移動の機能を包括的に把握することを目的とする。

2. 都市における移動の機能の抽出

①対象とする移動

本研究で想定するのは、少なくとも政令指定都市程度の規模の都市に住む人の都市内移動である。このうち、鉄道、自動車（自家用車、タクシー）を用いる移動を扱う。

②利用したデータ（文学作品）の概要

移動の機能の抽出には、移動過程における移動者の行動に加え、気分・考えた内容（以下、内面的な認識という）の詳細な記録が必要である。アンケートでは精度の点で問題が予想されたので、本研究では文学作品の移動場面を用いた。データの抽出方法としては、まず、大手出版社5社の文庫解説目録を中心に都市を舞台とすることが明示されている明治以降の日本の小説（推理小説は除いた）・随筆を抽出した。次にその中から詳細な移動過程の記述があるものを選び出した。データ数は表-1に示すとおり

り鉄道計104場面、自家用車・タクシー計40場面となった。

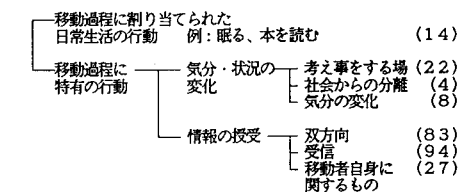
表-1 文学作品データの数

	鉄道						自家用車・タクシー					
	小説			随筆			小説			随筆		
	作品数	作者数	場面数	作品数	作者数	場面数	作品数	作者数	場面数	作品数	作者数	場面数
明治～戦前	4	3	8	1	1	2	10	0	0	0	0	0
戦後～昭和30年代	2	2	3	1	1	1	10	3	3	3	0	0
昭和40年代～現在	12	9	12	70	11	72	84	4	4	19	14	18
計	18	14	23	72	13	75	104	7	7	22	14	18

なお、表-1以外に比較用に都市外移動47場面を抽出した。

③移動の機能の抽出

文学作品の移動場面での主人公の行動、内面的な認識の変化より移動の機能を抽出した。なお、データとした作品は作家の都市生活の経験全体に基づいて成立していると考えられるので、移動目的による分類は行わなかった。図-1に示すとおり、まず、機能は日常生活に関わる行動が移動中に割り当てられたものと、移動過程でのみ生じるものに分けられる。前者は日常生活の時間的・空間的制約により、通常移動過程以外で行われる行動が移動中に割り当てられたもので、移動自体の特性との関連は薄い。しかし、この機能は都市外の移動に対して都市内移動を特徴づけるものである。一方、後者は大きく気分・状況の変化と情報の授受の2つの機能に別れる。サンプル数を見るとこのうち情報の授受に関する機能が大きな割合をしめることがわかる。



注：（）内は抽出されたサンプル数を示す
1 作品に複数の機能が含まれる場合があり作品数とは一致しない

図-1 移動の機能（大分類）

上記の機能はさらに細かい項目に分けられるのでそれらを表-2に示し、それぞれについて特徴を述べる。まず、気分・状況の変化に関わる機能であるが、これは、移動がきっかけとなって気分や考える内容が変化することおよび、周囲の人々と移動者の

関係が変化すること（自動車に乗ることで一時的に周囲の人との関係を絶つ等）を含む。以上は主として移動の動くという特質により成立している。一方、情報の授受に関する機能は、鉄道車内で乗り合わせる客等、移動の過程で接する他者や移動者自身の状況についての様々な情報を受信・発信することである。具体的には、交通手段の車内での会話や他の客の服装から流行を知るといような項目が含まれている。

なお、鉄道による移動について文学作品の書かれた時期別に機能の比較を行ったが、差は見られな

表-2 移動の機能（小分類）

項目	細目と例（網掛けはデータ例）
日常生活の行動の移動過程への割り当て	電車の中で読書（東京朝）
気分・状況の変化	離脱（現在おかれた状況とは全く関連のないことを考える） 帰宅の電車内で、頭だけ外して洗濯できたらと思慮する（川端康成） 追憶（以前の経験と思い出す） 厭ごとに学生時代に住んでいた頃の思い出がよみがえる（尾辻克彦） 反省（その日の出来事を思い返す） 服を買った後、乗りの電車の中で無駄遣いを後悔する（群像） 自動車車内で仕事上のことで心を配らずに本音を話す（村上春樹） 気分転換、緩衝、変身 自宅で今後の生活方法を考えていたが、結論が出ず電車に乗り込む（夏目漱石） 公園から近くにつれ父のことが頭に浮かぶ（尾辻克彦） 実装した大学教授が移動する過程で気分的にも若者になります（遠藤周作）
情報授受	双方向 会話の場（親密な会話の場—自家用車の場合） 近所の人と話しながら電車で通勤する（山口隆） 自動車の状態が移動者の気分に影響を与える マセラティに乗ると押しつぶされるような不快感を覚える（村上春樹） 他者との出会い（会話を伴う）の場 電車の中で小説の読者に話しかけられる（村上春樹） 特定の景色と感情が結びつく 緑の路地を聞いたときに見た松を電車から見るとその話を思い出す（川端康成） 周囲の人へ自己の存在を示す 雨の中周囲の運転者の目を意識しながらグッドのサインで走る（東山民夫） 社会との接触・社会の象徴 友人の妻との不義により全てを失った後で電車に乗り「ああ、世の中が動く」と周りの乗客に聞こえるようにつぶやく（夏目漱石） 世界との接触 夜の都心を自動車でしばらくあてもなく走る（村上春樹） 受信 知人の状況を知る・知人の意外な側面に気づく 知人（片方運転手）が電車に乗っていることから彼の異変を知る（山口隆） 電車の中での息子のふるまいから観察力の強さに気づく（川端康成） 他者を観察・他者の行動の幅を知る 電車の中で近くの男（馬券師）の会話から特異な生き方を知る（山口隆） 社会状況の発見・確認 電車の乗客の様子から敗戦直後の生活がまだ貧しいことを確認（志賀直哉） （定期的に）沿線・沿道を見る展望台 通勤の沿線に咲く赤い花の様子が気になる（山口隆） 有益な情報を得る 電車で隣の人が読む新聞の中に興味深い写真を見つける（藤原新也）
自己認識	自己確認、自己と他者の比較 乗りの電車の中でガラスに映る姿から髪型を変えようと思う（田辺聖子） 電車で前の男の仕草を見て、自分ではそのような行動をやめようと思う（山口隆）

注：用語の定義 他者：移動者の知らない人 社会：他者の集団、それを支える仕組み 世界：社会の外側にあり人の存在が意識に上らない領域

った。最近の作品で見られる機能はすでに初期の鉄道を扱った作品（夏目漱石、初期の志賀直哉など）に現れている。

④交通手段の影響

移動の機能には利用する交通手段の特性が大きく影響しており、特に移動過程での情報の授受にかかわる機能について影響が大きい。文学作品の移動場面の分析結果では自家用車・タクシーでは情報授受の対象として同乗者および自然環境に代表される世界が見られるが、鉄道では周囲の乗客とその背後にある社会の様子が中心となる。また、移動者自身に触れる際の記述のしかたに差がみられ、鉄道では外発的な型（他の客が見るであろう私、ガラスに映る私）が中心であるのに対して自家用車・タクシーでは内発的な型（私はこう思う）が多くなる。このことは、交通手段の違いが輸送力等だけではなく、移動者の都市や他の住民との関わり方にも影響を与えることを示唆していると考えられる。

⑤一時的移動と定期的移動の違い

今回のデータではサンプル数の少なさによる制約があるが、移動の一時性・定期性が特に情報の授受に関わる機能に影響を与えている。前者は後者に比べ社会の状況や車窓からの景色についての発見が特徴的に記述されている。

3. まとめ

本研究では、都市内の移動過程に着目し、文学作品の移動場面をもとに移動の機能を包括的に抽出した。その結果として、

①都市における移動は多様な機能を持つが、移動過程に特有な機能は大きく気分・状況の変化、情報の授受に分けられることが明らかになった。このうち文学作品の分析では情報の授受に関わる機能が特に大きな割合を占めていた。

②鉄道および自家用車・タクシーについて情報の授受に関する機能を比較した結果、情報の授受対象（同乗の客、都市の様子等）、授受の形態（外発的、内発的）が異なることが明らかになった。

参考文献

- 1) Salomon, I. (1985): "Telecommunications and Travel Substitution or Modified Mobility?", J. of Transport Economics and Policy, Vol. XIX, No. 3, pp. 219-235
- 2) 国際交通安全学会633プロジェクトチーム (1982) 「交通と通信の代替・補充関係」『国際交通安全学会誌』Vol. 1.8, No. 3, pp. 36-41